コシャマインの戦いに関する『新羅之記録』の史料的検討

新　藤　　透*

Study on the records about the Koshamain Battle in '*Shinra-no-Kiroku*'

Toru SHINDO

コシャマインの戦いとは，康正３年（1457）に，蝦夷地（現・北海道）南部の渡島半島で勃発した史料上最初に確認される和人とアイヌ民族との戦いである。この戦いに勝利した蠣崎氏（近世の松前氏）は，他の和人勢力を支配下に置くことになる。それほど重要な戦いではあるが，それを伝える史料は近世に成立した『新羅之記録』のみである。今までの研究は同書に信頼を寄せて為されてきた。

本稿は，『新羅之記録』の記事を他の史料と比較検討して，同書の記事がどの程度信頼がおけるものなのか検討をしたものである。その結果，道南十二館の位置や蠣崎氏の祖武田信広の蝦夷地渡海時期などの記述が疑わしいことが判明した。また，今日知られているコシャマインの戦いの通説は明治時代に書かれた史料に多くを依拠していることも分かった。

Koshamain battle is the war which broke out between *Wajin* (people having their roots in the main land of Japan) and *Ainu* (people having their roots in *Ezochi* (present Hokkaido), the northern island of Japan) in the Oshima peninsula of the southern Ezochi in 1457. It is the oldest war appeared in historiced records.The Kakizaki clan, appeared as Matsumae in the Kinsei period, who won this fighting, placed other *Wajin* powers under their rule. Although it is such an important event, we have the only one historical record mentioning it, '*Shinra-no-Kiroku*' which had come into existence at the Kinsei period and was considered as reliable in previous studies.

In this paper, '*Shinra-no-Kiroku*' was compared with other historical records, and examined to what extent its descriptions are trustworthy. Consequently, it became clear that there are some doubts in the descriptions concerning the location of *Dounan-Juunitate* (twelve castles of *Wajin*) and the time of the migration to *Ezochi* of TAKEDA Nobuhiro, the ancestor of the kakizaki clan. It became also clear that today's common view on Koshamain battle is based on the historical records written in the Meiji era.

＊　筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

1．はじめに

戦後、日本の北方領域（北海道島・千島列島・樺太〈現・サハリン〉）の歴史を研究する北方史が確立されて久しい。しかし、近世期に蝦夷地唯一の大名であった松前氏（中世は蠣崎氏）の権力確立過程期である中世・近世初期の研究は、近年進歩したとはいえ、蓄積が未だ少ない。その原因の一つとして一次史料が数点現存しているだけであり、纏まった史料としては、正保三年（一六四六）に松前景広によって編纂された『新羅之記録』のみであることがあげられよう。先行研究は、『新羅之記録』をはじめとする松前藩関係者が編纂した史料、松前藩各藩士の家に代々伝わる系図や由緒書を用いて進められてきた(1)。また、近年は東北の安東氏・南部氏の動向や、歴史考古学の発掘成果も取り入れられている(2)。だが、『新羅之記録』の記述の批判的検討は、アイヌ蜂起記事のみを取り扱った工藤大輔氏の研究があるのみである(3)。

工藤氏の研究は、コシャマインの戦いだけではなく、天文五年（一五三六）のタリコナの戦いまでの『新羅之記録』に書かれたアイヌ蜂起の記述を分析することを目的としている。その手法は一件ごとの蜂起記述を、他の史料と比較するというものではなく、蜂起記事の類別をはかっており、大きな視点からアイヌ蜂起がどう変化したのかについて検討されている。コシャマインの戦いについては、中世のアイヌ蜂起としては最大のものなので幾分詳しく触れられている。この戦いに関する結論としては、次の点をあげている。aコシャマインの戦いは「松前系図」では二回蜂起したと書かれているが、『新羅之記録』では一回と読み取れる。bコシャマインの戦いの『新羅之記録』の記事は、「松前系図」をベースにしてつくられたもの、としている。

工藤氏の研究は、コシャマインの戦いのみを取りあげたものではない。またこの戦いを詳しく取りあげた理由も、「松前系図」と『新羅之記録』との間に影響関係はあったのかという疑問に答えるべく、一例としてコシャマインをピックアップしているのであり、コシャマインの戦いそのものを対象としてはいない。それ故、より細かく検討する余地はあるものと考えられる。

以上のことから小稿では、『新羅之記録』にみられる中世アイヌ民族最初の蜂起、コシャマインの戦いの記述を批判的に検討し、それがどこまで信憑性があるのかを判断したい。また、今日のコシャマインの戦いの通説はどのように形成されたのかも検討したい。

2．コシャマインの戦いの通説的見解

ここでは、本論の検討を理解するうえで必要となる、コシャマインの戦いまでの通説を簡単に纏めたい。通説を纏めるにあたっては、個々の専門書からではなく、概説書から引用をする。概説書の叙述は「最もポピュラーな代表的史実の解釈」であり(4)、通説を知る上で最も適当であると考えられるからである。

2．1　三守護職体制(5)

中世の蝦夷地の支配権は、津軽を拠点としていた豪族安東氏が握っていた。鎌倉後期の内乱で安東氏は一族内で分裂し、以後も紛争が絶えず、蝦夷地の支配権は形骸化していた。

室町時代の享徳三年（一四五四）に、安東政季は東北の戦乱を逃れるため、武田信広・相原政胤・河野政通らを伴い蝦夷地に渡ったが、政季自身は、康正二年（一四五六）、同族の安東堯季の手引きで男鹿に移った。この蝦夷地に政季が滞在していた二年の期間に「三守護職体制」と呼ばれる体制が完成した。

当時の蝦夷地は和人が進出していたのは渡島半島のみであり、以北はアイヌ民族の居住する土地であった。渡島半島も完全に和人が支配していたというわけではなく、和人・アイヌ民族が雑居している状態であった。和人の中にはアイヌとの交易で力を付け、土豪化し、「館（たて）」を築き、周辺に影響力を及ぼす者も現れた（十二の館があることから「道南十二館」とよばれる）。これらは「館主（たてぬし）」と呼ばれる。館主達は安東氏と主従関係を結んでいたと考えられる。『新羅之記録』によれば、政季は蝦夷地渡航期間中に現在の松前町以東より函館市までの地域を管轄する「下之国」、「松前」、現在の松前町以西から現上ノ国町までを管轄する「上之国」の三地域に渡島半島を三分割し、それぞれに守護と副守護を任命したと記されている(6)。これが「三守護職体制」である。下之国守護には、茂別館の下国家政（安東政季の弟）副守護には箱館の河野政通、松前守護には大館の下国定季（安東政季の親族と考えられる）副守護には相原政胤、上之国守護には、武田信広（後に政季の婿になる）、副守護には、花沢館の蠣崎季繁（後に政季と親族関係になる）がそれぞれ政季により任じられたとされる。河野政通、相原政胤は名前に「政」の字が使用されている点から、通説では政季の直臣と考えられており、その他の人物も全て政季とゆかりのある人物という点から、安東氏―守護―各館主の政治序列化が強化されたと思われる。

2・2　コシャマインの戦い

安東政季が蝦夷地を離れた翌年の康正三年（一四五七）五月に、首長のコシャマインに率いられたアイヌが一斉蜂起した(7)。所謂コシャマインの戦いである。この戦いの通説は左記のようになっている。

一四五六（康正二）年春、志濃里の鍛冶屋村で、和人の鍛冶職人とアイヌの少年とマキリ（小刀）の良し悪しをめぐる争いから職人がアイヌの少年を刺殺するという事件が起きた。これを契機に渡島半島特に東部のアイヌが一斉に蜂起し、以後数十年もの間アイヌの蜂起、館主間抗争と蝦夷地は不安定な状況が続くのである。

一四五七（長禄元）年五月十四日、渡島東部のアイヌの首長コシャマインは、蝦夷地のアイヌの自由な生活を守るべく、アイヌ社会の危機感を背景に、まずもっとも経済的発展の著しい函館地方の館に総攻撃をかけた。この結果、わずかに下国家政の茂別館、蠣崎季繁の花沢館の二館を残し、十館が相次いで陥落した。当時花沢館の蠣崎氏のもとにあった客将武田信広(後の松前氏)は敗走した和人を再編して、苦戦の末ようやくコシャマインを謀略により討つことに成功した。後に武田信広は蠣崎氏の女婿となり、蠣崎氏の家督を継ぎ、本拠を大館（松前）に移した。

なお、『新羅之記録』にはコシャマインの戦いは「長禄元年五月十四日」に勃発したとされるが、「長禄」と改元されるのは九月二十八日であり、五月十四日は未だ康正三年なのであり、この記述は誤りである。

以上の纏めに少し補足をすると、これらの戦いの結果、早くも三者が均衡していた「三守護職体制」が崩れていることがいえる。渡島半島の和人勢力は松前氏の祖とされる、上之国守護武田信広の力が突出することになるのである。

3・『寛永譜』所収松前系図と『新羅之記録』

3・1　コシャマインの戦いの記述の比較

コシャマインの戦いが記されている編纂物史料は多数確認される。

この戦いの史料上の初見は、寛永二十年（一六四三）に完成した『寛永諸家系図伝』（以下『寛永譜』と略称する）所収の松前氏の系図（以後「松前系図」と呼称する）である。その三年後に「松前系図」には誤謬が多々あるとして、松前景広が、藩祖松前慶広の「永泉公之手冊」を参考にして編輯したという『新羅之記録』にもコシャマインの戦いの記述が勿論存在する。その両者をここでは比較してみたい。

3・1・1　「松前系図」

「松前系図」には左記のように記されている（数字は引用者）(8)。

①又武田の氏族といふ事ハ、むかし夷の千嶋に住するものを和多利党と号す、此時松前より東廿日路、西廿日路、人宅民家ありといへども、夷蜂起して志法の城主太郎左衛門・箱館の城主加賀守・松前の城主相原周防守其外所々の城郭をせめとるといへども、下国の城主茂別治部太輔・上国の城主蠣崎修理大夫、此二人なを城堅固にまもつて是に居す。②その折節、若州武田大膳大夫国信の嫡男太郎信広、父と不和の事ありて若州を立去て、商人の舟にのり松前にきたつて居す。③此時夷又蜂起して下国・上国の両城をせめとらんとす。時に信広其ゑらびにあたつて武者奉行と成て、夷の渠魁二人を討とり、賊徒数輩をきりころす。是によりて凶徒こと／＼く敗走す。そのゝち治部太輔下国より上国にきたつて会合し、酒宴のとき、修理大夫ハ来国俊の刀を信広にあたへ、治部太輔ハ菊一文字の刀を信広さづけて、その勇功を賞す。

コシャマインの名前、蜂起の勃発した年月日は「松前系図」には記されていないが、内容から判断して、以上の記述がコシャマインの戦いの記述であるといえる。

この記述は、大きく分けて①②③の三つに分けることが出来よう。①は「夷」＝アイヌ民族が蜂起して、「志法」・「箱館」・「松前」の三館が陥落し、「下国」・「上国」がもちこたえた。②は、「その折節」＝その時に若狭から武田信広が「松前」に渡来してきた。③この時にアイヌ民族が「又」蜂起したとある。「又」とある以上、①の蜂起を一回目の蜂起と見る事ができ、今回の蜂起は二回目であることがいえよう。この点は工藤論文でも指摘されていた。さらに、この二回目の蜂起は、武田信広が「武者奉行」となってアイヌ民族を敗走させたことが分かる。そして茂別館主の下国家政から「菊一文字」を与えられた。「武者奉行」とは、詳細は不明だが、アイヌ蜂起鎮圧の指揮官といえ、信広の手によって戦いは勝利に導かれ、茂別館主下国家政から「菊一文字」を与えられたことで、信広の蝦夷地

における一定の地位の保証がなされたと読みとることができよう。

最後に「松前系図」から読みとれる時系列を確認しておきたい。①一回目のアイヌ蜂起で、「志法」・「箱館」・「松前」の三館が陥落し、「下国」・「上国」が持ちこたえた。→②武田信広が若狭から渡海→③二回目のアイヌ蜂起。信広が「武者奉行」になり戦いを和人の勝利により終結させる。下国家政から「菊一文字」を拝領される。つまり、一回目の蜂起の後に信広が渡道したと「松前系図」からはいえるのである。この点を指摘しておきたい。

3．1．2『新羅之記録』

次ぎに、『新羅之記録』のコシャマインの戦いの記述をみてみる（数字は引用者）(9)。

①内海之宇須岸被攻破夷賊事者、有志濃里之鍛冶屋村家数百、康正二年春乙孩来而、令打鍛冶於劇刀処、乙孩与鍛冶論劇刀之善悪価而、鍛冶取劇刀突殺乙孩、依之夷狄悉蜂起而、自康正二年夏迪大永五年春、破東西数十日程中住所村々里々、殺者某事、起元於志濃里之鍛冶屋村也、活残人集住皆松前与天河（中略）

②上之国者預蠣崎武田若狭守信広、副置政季之婿蠣崎修理大夫季繁、令護夷賊襲来処、長禄元年五月十四日夷狄蜂起来而、攻撃志濃里之館主小林太郎左衛門尉良景、箱館之河野加賀守政通、其後攻落中野佐藤三郎左衛門尉季則、脇本南条治部少季継、穏内郡之館主蒔土甲斐守季直、覃部之今泉形部少季友、松前之守護下国山城守定季、相原周防守政胤、祢保田之近藤四郎右衛門尉季常、原口之岡辺六郎左衛門尉季澄、比石之館主畠山之末孫厚谷右近将監重政、所々之重鎮、雖然下之国之守護茂別八郎式部太輔家政、上之国之花沢之館主蠣崎修理大夫季繁、堅固守城居、③其時、上之国之守護信広朝臣為惣大将、射殺狄之酋長胡奢魔犬父子二人、斬殺侑多利数多、依之、凶賊悉敗北、其後式部太輔経中野路来山越於上之国、会若狭守修理大夫有献酬之礼、式部太輔家政者授刀（一文字）於信広被賞勇功、又修理大夫者授喬刀（来国俊）於信広、此時信広朝臣者従若州差来進（助包）之大刀於式部太輔也、

修理大夫無継子、故得政季朝臣之息女為子令嫁信広、居川北天河之洲崎之館仰家督、信広朝臣為実安東太政季朝臣之聟也、

〔（　）内は割注を指す〕

（書き下し文）

①内海の宇須岸夷賊に攻め破られし事、志濃里の鍛冶屋村に家数百有り、康生二年春乙孩来て鍛冶に劇刀を打たしめし処、乙孩と鍛冶と劇刀の善悪価を論じて、鍛冶劇刀を取り乙孩を突き殺す。之に依て夷狄悉く蜂起して、康生二年夏より大永五年春に迪るまで、東西数十里程の中に住する所の村々里々を破り、者某を殺す事、元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり。活き残りし人皆松前と天河とに集住す。

②上之国は蠣崎武田若狭守信広に預け、政季の婿蠣崎修理大夫季繁を副へ置き、夷賊の襲来を護らしめし処、長禄元年五月十四日夷狄発向し来って、志濃里の館主小林太郎左衛門尉良景・箱館の河野加賀守政通を攻め撃つ。其後中野の佐藤三郎左衛門尉季則・脇本の南條治部少季継・穏内郡の館主蒔土甲斐守季直・覃部の今泉刑部少季友・松前の守護下国山城守定季・相原周防守政胤・祢保田の近藤四郎右衛門尉季常・原口の岡辺六郎左衛門尉季澄・比石の館主畠山の末孫厚谷右近将監重政所々の重鎮を攻め落とす。然りと雖も下之国の守護茂別八郎式部太輔家政・上之国の花沢の館主蠣崎修理大夫季繁、堅固に城を守り居す。③其時上之国の守護信広朝臣惣大将として、狄の酋長湖奢魔犬父子二人を射殺し、侑多利数多を斬り殺す。之に依て凶賊悉く敗北す。其後式部太輔中野の路を経て山越に来り、若狭守修理大夫に会い、献酬の礼有り。式部太輔家政は刀（一文字）を信広に授け勇功を賞せらる。また修理大夫は喬刀（来国俊）を信広に授く。此時信広朝臣は若州より来りし（助包）の大刀を式部太輔に進ずるなり。

修理大夫継子無し。故に政季朝臣の息女を得て子と為し信広に嫁せしめ、川北天河の洲崎の館に居へて家督と仰ぐ。

この記述も、①②③の三つに分割することが出来るが、内容は「松前系図」と若干異なったものになっている。

①は、「宇須岸」（現・函館市）が、「賊」＝アイヌ民族にうち破られたこととして、その顛末を記している。志濃里（現・函館市）の鍛冶屋村に、康正二年（一四五六）春に、「乙孩（オツガイ）」＝アイヌの青年が尋ねてきた。「乙孩」は、鍛冶屋に「劇刀（マキリ）」＝アイヌが使用するナイフを打たせたところ、「乙孩」と鍛冶屋との間で「劇刀」の「善悪価」を巡って諍いが起こり、鍛冶屋は「乙孩」を突き殺してしまった。それを期にアイヌ民族が蜂起して康正二年から、大永五年（一五二五）まで「者某（シャモ）」＝

（四）

アイヌ語で和人を夥しく殺したとある。そして生き残った和人は松前と天河(あまのがわ)(現・上ノ国町)に集住したとされている。この「乙孩」が殺された事件が発端となってコシャマインの戦いが勃発したと現在解されているが、『新羅之記録』には、康正二年から大永五年までの約七十年間のアイヌ蜂起の元になったと書かれており、コシャマインの戦いの直接的な原因とは記されていない。①と②の記述の間には、アイヌ蜂起とは関係のない記事が挟まれており、そのことからも、編者松前景広はアイヌの殺人事件とコシャマインの戦いとを直接的に関連づけているとはいえないであろう。

②は、康正三年五月十四日に原因は不明だがアイヌ民族が蜂起した。この時には、既に武田信広は蝦夷地に渡海していることを前提にした記述になっており、「松前系図」の記述と相異していることがいえる。実は『新羅之記録』では宝徳三年に信広が渡海したと、この記事よりも前に書かれているのである。

アイヌ民族は、この記述によれば道南十二館の内、十館を攻め落としている。そして、残りの二館、下国家政(茂別館)と蠣崎季繁(花沢館)の二館だけが攻略を免れていたとしている。②には、武田信広やコシャマインの名前は記されていないので、この康正三年の戦いに両者が参戦していたかどうかは史料上判然としないが、おそらくコシャマインは「狄之酋長」であることから、参加していたことであろうし、信広も持ちこたえていた二館の花沢館に居住していたはずであり、参戦していたと考えるのが自然であろう。

③は、「其時」という文言で始まっている。二回目の蜂起である。道南十二館は殆ど落城し、残る二館も風前の灯火である、正に「其時」、武田信広が「惣大将」という形で登場してくる。「松前系図」の「武者奉行」より格上げされていることが指摘できよう。そして、「狄の酋長胡奢魔犬父子」を射殺し「侑多利(ウタリ)」＝アイヌ語で同胞、つまり多くのアイヌ人を斬り殺し、戦いを和人の勝利に結びつけた。そして、下国家政から刀を貰い請けた云々の記述は「松前系図」と大幅な相違点は見あたらない。

①の戦いはコシャマインの戦いの原因ではなく、七十年間に渡るアイヌ蜂起の遠因とでもいう事件の記述であって、直接的には関係がないと読める。『新羅之記録』のコシャマインの戦いの記述は②③であるといえる。その特徴をいくつかあげてみる。まず、史料上初めて「胡奢魔犬」＝コシャマインの名が見えることである。二点目に、陥落した館の名が増えていることがあげられる。全体的に記述が詳しくなっている。また、「松前系図」には、一回目の蜂起と二回目の蜂起の間に、武田信広渡来の記事があり、信広が一回目の蜂起には参加できなかったと推測できるが、『新羅之記録』には一回目の蜂起である②の戦い以前に上之国守護になっており、当初から参加していたような推測をさせる記述の仕方になっている。そして、二回目の蜂起の際、信広の地位が「武者奉行」から「惣大将」に格上げされている。

『新羅之記録』のコシャマインの戦いの記述の時系列を再度確認すると、①武田信広は既に渡来し、上之国守護になっていた。→②康正三年五月十四日にアイヌが蜂起し、道南十二館の内、十館が陥落し、二館のみ持ちこたえていた。→③武田信広が「惣大将」となって、コシャマイン父子を討ち、アイヌを多数殺し、戦いは和人の勝利に終わった。信広は蝦夷地での一定の地位を築いた。以上のように纏められる。

3．2 『新羅之記録』の信憑性

3．2．1 原口館の位置

『新羅之記録』に名が記されている道南十二館と呼ばれる館は、正確には現在のどの位置に比定されるのか、依然として不明な館が多い。近年、歴史考古学の発展により北海道でも発掘が盛んである。館がかつて有ったと伝承されている土地の考古学的調査も武田信広が構築した勝山館(新たに信広が築いた館であるので道南十二館に含まれていない)をはじめとして活発に行われている。それは、道南十二館へもその調査の手は伸び始めてきている。しかし、現在ではその後の近世期の開発事業や戦後の土地改良事業などで、調査が事実上不可能な遺跡もおおくなっている。

ここで問題にするのは、『新羅之記録』に岡辺季澄の居館として記され、コシャマインの戦いの一回目の蜂起でアイヌにより陥落させられたとする原口館についてである(伝原口館比定地は、現在松前町原口)。この館については、春日敏宏氏は、その後の編纂物史料にも原口館も、岡辺氏の名前も全く著されていないことから、早くに絶家したものと推測されている[10]。しかし原口館と岡辺氏については、幕末から明治初期に著された史料ではあるが、「戸井村岡部館の古蹟と其発掘物の事」(『松風夷談』)というタイトルで、以下のような記述がある[11]。

文政四年、箱館ノ東ニトイト云フ処ニテ古銭掘出シ洗ヒテミガキ候処、文字

(五)

分リ、大観通宝、開元、永楽、洪武銭ノヨシ、依蝦夷地住居ノモノヨリ公儀へ申立ニ付御調子コレアリ候処、凡六十二貫余有之候由、其外水晶、朱砂ノ類百品余モ掘出候ヨシ、右トイト申処ニ石碑アリ、公辺御役人中ヨリ右石碑石摺ニ申付ラレ、摺候へ共、文字聢ト相分リ申サズ、右石摺ノ内ニ岡部六弥太六代孫岡部六左衛門尉季澄ト云名ノ所斗リ顕然ト分リ候由、昔ヨリ此辺ノ沢ニ折節光リ物度々有之、其所ノ人ニテモ浜辺ヘ行キ見ルコト昔ヨリ禁シ候由、右ノ辺ヨリ石櫃六尺四方有之品一個掘出シ候、右ノ内ハ見申サズ由、内ニハ如何ナルモノ有之候ヤ、外ニ沙汰之ナク、公辺御評議次第被仰出可有之由、松前ヨリ由来、

右の記述によれば、文政四年（一八二一）に、下北半島の対岸の戸井（現・北海道戸井町）から、大量の約六十二貫文もの古銭が出土し、付近の「岡部館」と呼ばれる所に「岡部六弥太六代孫岡部六左衛門尉季澄」という石碑があったとしている。出土した古銭は「大観通宝、開元、永楽、洪武銭」とあるので、何れも日本では鎌倉・室町期に多く流通した物で、コシャマインの戦いの時期と一致している。それでは、松前町原口の「原口館」はどのような遺跡なのか。一九九三年（平成五）三月に纏められた、『原口館跡擬定地発掘調査報告書』では、十～十一世紀の擦文時代の「防御性集落」であるとされている(12)。このことから、少なくとも松前の原口館はコシャマインの時代の遺跡ではないということは明確である。

以上のことを纏めると、①松前町原口の「原口館」は、岡辺氏とは無関係である。②岡辺氏の居館は戸井町の「岡部館」であると思われる。①②からは、『新羅之記録』の道南十二館の位置とその館主の記述は、そのまま信頼することは危険であるといえると共に、『松風夷談』のような松前藩関係者以外が編集した史料も無視は出来ないといえよう。また、戸井の「岡部館」のことは、『新羅之記録』には全く記されていない。『新羅之記録』の道南十二館の記述も、どのような史料を根拠にして編纂されたのか不明であるが、十二館や勝山館といったもの以外にも館が存在したことが、この事例からは窺える。

3．2．2 蝦夷地渡海時期の検討

「松前系図」と『新羅之記録』では、武田信広の蝦夷地渡海時期が食い違っていることは前述した。「松前系図」では、文脈上から康正三年の一回目の蜂起の後に記されており、『新羅之記録』では、信広の渡海時期、並びに経路については次のように書かれている(13)。

（十六）

信広朝臣者稟性大力強盛而為勇気麁豪之間、信賢朝臣与国信朝臣共家思且国、不得止事合心義絶而欲令已暨生害之刻、家老之数輩就哀惜、遁其難、家子佐々木三郎兵衛尉源繁綱、郎等工藤九郎左衛門祐長、其外侍三人而、信広朝臣二十一歳之穐、宝徳三年三月二十八日密出国於夜中、是併依繁綱与祐長之計略也、下東関足利、少時住、享徳元年三月来奥州田名部、知行蠣崎而後、伊駒安東太政季朝臣同心、八月二十八日渡此国、

（書き下し文）

信広朝臣は稟性大力強盛にして勇気麁豪たるの間、信賢朝臣と国信朝臣と共に且つは家を思ひ且つは国を思ひて、止む事を得ず心を合はせて義絶して已に生害に暨ばしめんと欲するの刻、家老の数輩哀惜に就き、其難を遁れ、家の子佐々木三郎兵衛尉源繁綱・郎等工藤九郎左衛門祐長、其外侍三人を召具して、信広朝臣二十一歳の秋、宝徳三年三月二十八日密かに国を夜中に出づ。是併せて繁綱と祐長の計略に依るなり。東関足利に下り、少時住し、享徳元年三月奥州田名部に来り、蠣崎を知行して後、伊駒安東太政季朝臣と同心し、八月廿八日此国に渡る。

右の記述によれば、信広は若狭武田氏の家督争いから逃れるために、家子佐々木繁綱、郎等工藤祐長と共に、宝徳三年（一四五一）秋に夜半密かに若狭を脱出したとされる。一行は下野足利に暫し止まったが、享徳元年（一四五二）三月に奥州田名部に到着、おそらくこの地方の領主安東氏から、蠣崎を知行地として与えられた。しかし同年八月二十八日に、安東氏の内紛により、敗れた安東政季と共に「此国」に渡ったとされる。つまり、信広らの渡海時期は享徳元年八月二十八日ということになる。しかし、同じ『新羅之記録』でも安東政季の説明の箇所では、次のように記されている(14)。

伊駒政季朝臣者十三港盛季之舎弟安東四郎道貞之息男潮潟四郎重季之嫡男也、十三之湊破滅之節若冠而被生虜、糠部之八戸而改名、号安東太政季、知行田名部継家督、而蠣崎武田若狭守信広朝臣、相原周防守政胤、河野加賀右

衛門尉越知政通、以計略同（享徳―引用者）三年八月二十八日従大畑出船渡狄之嶋也

（書き下し文）

伊駒政季朝臣は十三の湊盛季の舎弟安東四郎道貞の息男潮潟四郎重季の嫡男なり。十三之湊破滅の節若冠にて生虜られ、糠部の八戸にて名を改め、安東太と号し、田名部を知行し、家督を継ぐ。而して蠣崎武田若狭守信広朝臣・相原周防守政胤・河野加賀右衛門尉越智政通、計略を以て同三年八月二十八日大畑より出船して狄の嶋に渡るなり。

右の記述によれば、武田信広は、相原政胤、河野政通らと共に、安東政季の従者として蝦夷地に、享徳三年（一四五四）八月二十八日に渡ったとされる。前の記述と異なっており、どちらが正しいかは判然としない。『新羅之記録』は前後で記述の食い違いが現れている点のみ、ここでは指摘しておく。

松前藩編纂物史料からはこれ以上のことは指摘出来ないが、同時期の北東北での動向を加味すると、また新たな事がいえる。康正三年（一四五七）二月に、下北半島の田名部を知行していた蠣崎蔵人は、順法寺城主新田義純（北部王家）を暗殺したため、北部王家の守護である南部政経は、朝廷の許可を得て蔵人を討ち取ったのである（『八戸家系』・『八戸家伝記』）[15]。所謂「蠣崎蔵人の乱」と呼ばれる事件で、南部氏は朝廷ならびに、室町幕府の地方機関である奥州探題大崎教兼から恩賞を受け[16]、以後北東北の安東氏の勢力は大きく後退し、代わって南部氏の時代となったのである。小稿は、「蠣崎蔵人の乱」の東北中世史における歴史学的評価を主題とするものではないので、深くは追求しないが、問題は、この反乱を起こしたとされる蔵人のその後である。

蠣崎蔵人は敗走したが、近世期に編纂された史料では、松前に逃れたと記されている。このことは、『松前町史』通説編第一巻上巻（松前町　一九八四年　二六五～六頁）にも簡単に触れられているが、史実ではなく「伝承」として紹介されているにすぎない。ここでは史料を引用し詳しくみていきたい。例えば、「後に聞は松前江渡海して後運を待し也」（『三翁昔語』巻之二）[17]、「蠣崎氏は長く北蝦夷松前に移る」（『新撰陸奥国誌』巻五十四）[18]とあり、何れも蔵人が、敗北して松前に逃れたとしている。戦いは康正三年三月に終結したので（『八戸家伝記』）[19]、康正三年（九月二十八日以降は長禄元年）中に松前に渡ったと読みとることが出来る。更に、『南部史要』には、「松前に遁れたる蠣崎蔵人は蝦夷の事情を諳んじ能く蝦夷人を遇せるより人望を得てその地に君臨し松前氏の祖となる」とあり[20]、『蝦夷国私記』（江戸後期に箱館で、民間によって編纂された）にも「松前志摩守殿家は七百年保て本国南部之内蠣崎と言所の野武士也」とある[21]。『南部史要』は南部地方の歴史を近世期に編纂したものだが、それによると、蠣崎蔵人は松前に逃れて松前氏の祖先となるとし、『蝦夷国私記』でも、松前氏の祖先は若狭武田氏の出身ではなく、蠣崎の野武士の出であると記している。以上の諸史料の記述は、ほぼ一致しており、纏めると蠣崎蔵人が戦いに敗れて松前に逃れ、松前氏の祖先になったといえよう。松前氏の祖先とは武田信広のことを指すと思われる。そして、その時期は康正三年（長禄元年）なのである。

康正三年は九月二十八日に「長禄」と改元される。康正三年といえば、蝦夷地ではコシャマインの戦いが勃発した年である。前述したように、『新羅之記録』では享徳元年もしくは同三年とあり、前後で武田信広渡海時期が一致していない。また、東北の編纂物史料とも一致していない。「松前系図」では、康正三年のコシャマインの戦いの一回目の蜂起の後に渡海したと読めると前述した。「松前系図」と東北の編纂物史料との記述は一致している。このことから、従来は根拠薄弱だと思われていた蠣崎蔵人＝武田信広説も全くの「伝承」ではないといえよう。したがって、武田信広の蝦夷地渡海時期は一回目の蜂起後であるという可能性がある。もし、そうだと仮定すれば、「松前系図」にも、『新羅之記録』の記述にも、最初の蜂起の部分には信広の名前はなかった説明がつく。しかし現時点では推測の域を脱しておらず、この点に関しては、更なる考証が今後も必要である。

3・3　小括

今までの検討から、次の点が指摘できよう。①コシャマインの戦いは、康正三年（一四五七）に勃発したと思われ、蜂起は二回に分けることが出来る。②康正二年頃の宇須岸近郊の鍛冶屋村で起こった「乙孩」殺人事件は、コシャマインの戦いのみの直接的な原因とは、史料には書かれていない。③武田信広の蝦夷地渡海時期は康正三年（長禄元年）コシャマインの戦いの一回目の蜂起の後である可能性がある。④原口館の位置比定の検討から明らかなように、『新羅之記録』の道南十二館の記述は、そのまま信用することは危険であると思われる。

この五点と、北海道で、歴史教育の教材として著された『北海道の歴史60話』

（三省堂　一九九六）の「コシャマインの戦い」の記述とは大いに異なる。コシャマインは、「アイヌの自由な生活を守るべく、アイヌ社会の危機感を背景」に蜂起したとは史料上確認が取れず、「客将武田信広（後の松前氏）は敗走した和人を再編して、苦戦の末ようやくコシャマインを謀略により討つことに成功」との描写も、史料からは見いだせなかった。蠣崎氏（後の松前氏）が酒宴の席で謀略を用いてアイヌのリーダーを殺害するという場面は、蠣崎光広・良広代、また寛文九年（一六六九）のシャクシャインの戦いでみられるが、コシャマインの戦いでは、最古の編纂物史料二種（「松前系図」・『新羅之記録』）からは、そのような記述は見いだせなかった。

それでは、こういったコシャマインの戦いの通説理解はどのように形成されてきたのか。『新羅之記録』以後に成立した編纂物史料の、コシャマインの戦いに関する記述を、次節でみていきたい。

4．「コシャマインの戦い」の形成

4．1　コシャマインの戦いの通説的見解

コシャマインの戦いの通説は、前掲した纏めから、①和人の進出によりアイヌ民族が圧迫されていた。それが東部の首長コシャマインが蜂起した原因。②渡島半島東部函館地方から勃発した。③武田信広は当初から参加し、謀略を用いてコシャマインを討った。④信広は、和人の中に自己の地位を確立させた。この四点に集約できよう。これらの点が、後代の代表的な松前藩関係者が編纂した史料に見いだせるのか、それを以下検討する。

4．2　通説の検討

4．2．1　『蝦夷之国松前年々記』寛文年間（一六六一～一六七三）成立か

まず、『福山秘府　年歴部』の元と成ったと思われる『蝦夷之国松前年々記』の記事をみてみたい[22]。

長禄元丁丑
（中略）
五月十四日夷蜂起ス、攻撃志濃利之館主小林太郎左衛門良景、箱舘之河野加賀守政通其通後攻滅ス、中野三郎、佐藤三郎左衛門季則、脇本之南條治部少輔季継、穏内之館主蒔土甲斐守季直、覃部之今井刑部少輔季友、松前ノ守護下国山城守定季、相原周防守政胤、祢保田之近藤四郎右衛門季常、原口之岡部六郎左衛門季澄、比石之畠山ノ末孫厚谷右近将監重政、所々之重鎮□
同二年戊寅
去年反逆ノ長、胡奢魔狄父子二人其外斬殺ス、侑多連数多ヲ因茲山賊悉ク敗北ス

ほぼ、『新羅之記録』と同様の内容であるが、「長禄元丁丑」の記事は途中で切れている。通説の根拠は、①は読みとることは難しい。コシャマインの名は見えるが「東部の首長」とは書かれていない。②は最初に攻撃を受けたのが「志濃利」、「箱館」とあるので、戦いが東部地方から発生したのが読みとれる。③は、信広蝦夷地渡海は、宝徳三年と以前の記述で確認できるので、最初から参加していた可能性はある。④は確認できない。

4．2．2　松前広長『福山秘府　年歴部』安永九年（一七八〇）序

次ぎに、松前藩の家老職を務め、また歴史家でもある松前広長が、諸史料を集め編纂した『福山秘府』の記述を示す[23]。

長禄丁丑
○松前年代記曰、夏五月十四日、蝦夷大乱、與二志乃利小林太郎左衛門良景・箱館河野加賀政通等一戦、而後蝦賊亦攻二破中野佐藤三郎左衛門季則・南條治部季継・穏内薦槌甲斐季直・覃部今泉刑部季友・松前下国山城定季・相原周防政胤・祢保田近藤四郎右衛門季常・原口岡邊六左衛門季澄・比石厚谷右近重政等之諸館主一（割注略）。雖レ然下国守護茂別（割注略）八郎式部（割注略）家政・上国館主蠣崎修理太夫季繁、猶堅守レ館居焉。于レ時　始祖武田信広膺二其択一為二先鋒一、遂討二夷賊酋長父子弐人及賊徒数輩一平治焉。於レ是諸館主各頻賞二　始祖之戦功一、令三始祖推以為二季繁之嗣子一。季繁家政各解二佩刀一以貽二始祖一。季繁所レ貽太刀来国俊、家政所レ貽刀菊一文字。始祖亦與二刀于家政一。銘助包。于レ時会二親族一而略行二建国之大礼一云。是時　始祖築二塁于上国河北天河洲崎一居焉、（中略）
二戊寅

松前年代記曰、是歳誅二夷酋長父子一。
按、是誅二伐賊残党一也。

①、②は『蝦夷之国松前年々記』と同じである。③も宝徳三年渡海と以前の記述にあるので、同じく最初から信広が参加していた可能性は否定できない。④は『新羅之記録』の記述と同様に、信広は蠣崎季繁・下国家政から太刀を貰い請けたとある。しかし、『福山秘府』は更に、「建国之大礼」を執り行ったとあるので、信広の和人勢力内での地位が上昇したことがわかり、「始祖築塁于上国河北天河洲崎居焉」とあるので、信広が蠣崎の「客将」からはっきりと独立したことがわかる。

4．2．3　新田千里『松前家記』明治十年（一八七七）成立

最後に、松前藩士族の新田千里が明治初期に著した、松前氏の歴史書『松前家記』をみてみる。本書は始祖武田信広から、十八代当主松前徳広まで扱っており、最も完備した編纂物史料といわれ、明治以来の北方史研究に屡々引用されている史料である[24]。

長禄元年丁丑信広花沢城ニ在リ
五月十五日東部ノ酋長胡奢麻尹父子大挙入寇、勢益猖獗ス、此時渡島南界ノ諸豪族志濃里ノ城主小林良景太郎左衛門尉ト称ス、宇須岸ノ城主河野政通加賀守ト称ス、中野ノ城主佐藤季則三郎左衛門尉ト称ス、脇本ノ城主南條季継治部少輔ト称ス、穏内ノ城主菰土季直甲斐守ト称ス、覃部ノ城主今泉季友刑部少輔ト称ス、大館ノ城主下国季直（定季カ）山城守ト称ス、相原政胤、祢保田ノ城主近藤季常四郎左衛門ト称ス、原口ノ城主岡部季澄六郎左衛門ト称ス、厚谷重政等防戦力竭キ咸城ヲ棄テ亡ク、茂別家政式部太輔ト称ス下国ノ城ヲ守リ、信広花沢ノ城ヲ守リ勢尚未タ屈セス、是ニ於テ諸豪会議信広ヲ推シテ主帥トス、信広乃チ残兵ヲ糾シテ東発ス、六月廿七日大ニ七重浜ニ戦フ、衆寡敵セス、我軍幾ント敗レントス、信広佯走朽木中ニ匿ル、胡奢麻尹父子追躡ス、信広居箭一発父子ヲ洞シ、直チニ木中ヨリ跳出、大刀ヲ揮ツテ稗酋数人ヲ斬ル、我兵奮撃大ニ之ニ克ツ、余衆潰散、諸部震慴ス、茂別家政花沢ニ来リ、季繁ト会シ各宝刀ヲ信広ニ贈ツテ其以テ戦捷ヲ賀ス季繁又伊駒政季ノ女ヲ養フテ信広ニ配ス、七月朔諸豪勧進、信広始メテ国ヲ建ツ、是ヨリ諸豪皆信広ニ臣事ス、八月新城ヲ天王河北ニ築キ勝山館ト名ケ信広徒ル
二年戊寅正月二日満月出ス、四月佐々木繁綱、工藤祐長ヲ東部ニ遣ハシテ胡奢麻尹ノ余党ヲ勦ス

①については、コシャマインの蜂起の原因は記されていないが、「東部ノ酋長」とあることから、通説の根拠が確認できる。②「宇須岸」（現・函館）などが陥落させられている点から、当初は函館地方を中心とした蜂起と分かる。③信広渡海は、宝徳三年の項に書かれているので、コシャマイン蜂起時には既に蝦夷地に渡っていた。信広は、当初からこの戦いに参加し、二回目の蜂起は「主帥」として軍を率いている。また、「謀略」に関しても、信広は、コシャマイン父子を「朽木中ニ匿ル、胡奢麻尹父子追躡ス、信広居箭一発父子ヲ洞シ、直チニ木中ヨリ跳出、大刀ヲ揮ツテ稗酋数人ヲ斬ル」とあり、待ち伏せをしていて襲ったことが書かれているので、これが「謀略」にあたるのではないだろうか。④信広は戦い終結後、「信広始メテ国ヲ建ツ、是ヨリ諸豪皆信広ニ臣事ス」とあることから信広は和人勢力の中で、権力を掌握したと読みとれる。従って通説の根拠もこの記事に見いだすことができる。

通説の四点が、『松前家記』の記述に殆ど確認できる。従って、コシャマインの戦いの通説は最も新しい編纂物史料『松前家記』に依拠していたといえる。

5．おわりに

コシャマインの戦いは、史料上確認できる最初のアイヌ民族と和人との戦いである。この戦いに勝利した武田信広は、近世の極北大名松前氏の祖となるのである。

しかしコシャマインの戦いの『新羅之記録』の記述はそれが史実かどうかは疑わしいことが小稿の検討で明らかになったと思われる。『新羅之記録』には、武田信広渡海時期を宝徳三年に設定し、信広を戦いの当初から参加していたように書き換えられている可能性があることを指摘した。また、原口館の位置比定から、「道南十二館」と呼ばれる館の記述も信憑性が薄いことが指摘できた。更に、コシャマインの戦いの通説は、その多くを明治十年に成立した『松前家記』に依っていたことも明らかになった。

「松前系図」・『新羅之記録』といった編纂物史料を批判的に検討した結果、以上の点が指摘出来た。このことを踏まえていうと、コシャマインの戦いの記述は後世に編纂された史料ほど、松前氏祖武田信広の活躍を際だたせようと書かれているのではないだろうか。例えば「松前系図」の「武者奉行」が、『新羅之記録』では「惣大将」となり、『松前家記』では戦後信広が「建国の大礼」を行い和人の統率者となったとある。なぜ、そのように編者たちは信広を英雄視する必要があったのであろう。それを研究することで、松前氏が自身の「歴史」をどのように自己の権力の正統性を主張することに利用したのか明らかになると思われる。今後はそういった方面からのアプローチからの検討を行いたい。

〔注〕

(1) ①海保嶺夫『近世蝦夷地成立史の研究』三一書房　一九八四年、②春日敏宏「極北大名蠣崎氏の権力構造」(『松前藩と松前』二十三号　一九八五年二月)などがある。

(2) 入間田宣夫／小林真人／斉藤利男・編『北の内海世界』山川出版社　一九九九年など

(3) 工藤大輔「15・16世紀の蝦夷蜂起記事について」(『第三回「環オホーツク海文化のつどい」研究報告書』一九九五年)など

(4) 澤登寛聡『日本近世史研究の技法』改訂版　澤登寛聡　ブックレット日本近世史　第一集　一九九九年　十頁

(5) ここでの記述は、田端宏／桑原真人／船津功／関口明『新版県史一　北海道の歴史』(山川出版社　二〇〇〇年)五十八～六十一頁を参考にした。

(6) 松前景広「新羅之記録」(北海道・編『新北海道史』第七巻　史料一　新北海道史印刷出版企業体　一九六九年)十八頁

(7) ここの記述は、木村尚俊／小林真人／田端宏／桑原真人／小野寺正巳／森岡武雄・編『北海道の歴史60話』(三省堂　一九九六年)四十八～五十一頁を参考にした。前掲『北海道の歴史』では、コシャマインの戦いの記述がやや簡略的すぎるのと、本書は北海道の中学・高校生向けの北海道地域史の歴史教育の副読本としても使用できるように編集されたとしている(「はじめに」)からであり、学校教育は最もポピュラーな説を教えるのが通常であると思われ、そのような理由で小稿では本書を引用した。

(8) 斎木一馬／林亮勝／橋本政宣・校訂『寛永諸家系図伝』第四　続群書類従完成会　一九八一年　一二四頁

(9) 前掲松前景広「新羅之記録」十四頁、十八～九頁

(10) 春日敏宏「松前藩成立期に関する一考察―家臣団編成を中心に―」(『松前藩と松前』十九号　一九八三年三月)

(11) 『松風夷談』函館市立図書館郷土資料室所蔵

(12) 『史跡　原口館　平成四年度原口館跡擬定地発掘調査報告書』北海道松前町教育委員会　一九九三年三月

戸井館に関しては、「戸井館は和人根拠地域にあって、その成立、存続期間は明らかでない」(千代肇「中世の戸井館址調査報告」百十七頁〈『北海道考古学』第五号　一九六九年〉)とされている。詳細は歴史考古学的調査が待たれるが、館が存在し、和人が居住していたことは確かであると思われる。

なお、小林真人氏も「北海道の戦国時代と中世アイヌ民族の社会と文化」(前掲『北の内海世界』八十四～五頁)で、筆者と同様の指摘をしておられるが、積極的に『新羅之記録』の記述を疑問視はしておられない。

(13) 前掲松前景広「新羅之記録」十三頁

(14) 前掲松前景広「新羅之記録」十七頁

(15) 鷲尾順敬・編『南部家文書』鷲尾順敬　一九三九年

(16) 前掲鷲尾順敬・編『南部家文書』には、朝廷からの任官を記す口宣案が多く収録されている。

(17) 青森県立図書館／青森県叢書刊行会・編『青森県叢書　第五編　三翁昔語』青森県立図書館／青森県叢書刊行会　一九五三年

(18) 青森県文化財保護協会・編『みちのく双書第十七集　新撰陸奥国誌　第三巻』青森県文化財保護協会　一九六五年

(19) 前掲青森県立図書館／青森県叢書刊行会・編『青森県叢書　第五編　三翁昔語』

(20) 菊池悟郎・編『南部史要』菊池悟郎　一九一一年

(21) 『蝦夷国私記』函館市立図書館郷土資料室所蔵

(22) 『蝦夷之国松前年々記』函館市立図書館郷土資料室所蔵

(23) 松前広長「福山秘府」(北海道庁・編『新撰北海道史』第五巻史料一　北海道庁　一九三七年)五～六頁

(24) 新田千里「松前家記」(松前町史編集室・編『松前町史』史料編第一巻　第一印刷出版部　一九七四年)六頁